

ディズナ バンテージ ハブ&リム シリーズ

世の中にありそうでないモノの製品化を実現する。バンテージハブとリムは、機材としての実用性と美しさと価格のバランスが良い塩梅で取れた製品といえます。

▶ハブのベアリングには唯一自転車専用のベアリングを作るアメリカメーカー「Enduro」を使用。ディスク用は36ノッチによって敏速で強い踏み出しをリムブレーキ用は24ノッチでボディーをスマートに軽量仕様となっています。何と言っても美しいシルバーのボディーは工場で作成を繰り返し、可能な限り滑らかな形状にこだわり、大きな曲線で形成されています。汎用性の高いHG spline Lを採用している点も見逃せません。クイックとスルーの交換エンドキャップも車両変更時に役立ちます。



◀バンテージハブはディスクスルー・ディスクQR・リムブレーキの3種類、美しい銀色に滑らかなラインが際立ちます。写真右側にあるリムブレーキ用のバンテージCハブは前後で328gと軽量、春発売予定です。



▲クイックとスルーとにフレームが変わっても使えるよう開発したのが交換エンドキャップです。センターロック台座を隠すカバーまで開発しました。春発売予定です。

▶リムにもこだわりが詰まっています。

まず素材はマンガン・ニオブ含有のスーパーアロイを採用し、繋ぎにはピンではなく差し込み圧入するSLEEVEを使用、非常に滑らかな仕上げとなっており、美しいシルバーと相まってバイクの出立が金属によって新鮮に引き締まります。

▶700Cはリム幅(15/19/21/25)の4種類。19/21/25はブラックもあり、写真右端のディスク用25は春頃の発売。バンテージ15と19は36Hも設定し、トラックハブなどにも調和します。26と27.5インチのMTB向けはグランジ レンジャーリムと言います。



～金属光沢宿す銀色製品～

東京サンエスオリジナル商品には、自転車愛好家の皆さんに幅広くカスタマイズの楽しさを味わっていただくために以前からシルバーパーツを多く揃えてきました。大勢の流れによって選択幅の狭まる傾向にある現代に於いても、指向性の強いモノを大切にしていきたいと考えています。

CYCLOCROSS TOKYO
シクロクロス東京 2025

2月8-9日に東京ベイエリアのお台場にて開催されたシクロクロスレース。好天にも恵まれ多くの皆さんで賑わい、都心レースを楽しまれたことと思います。弊社もブースを構え、サポート選手たちや愛好者の皆さんも立ち寄りいただきました。OnebyESUに乗るみなさんを少し写真で紹介します。



◀Elite MEN ★ME1 TOP35に出場したサポートライダーの鈴木来入選手(OnebyESU-ICV)は重要なスタートダッシュと位置取りも決まり、直角コーナー後も先頭グループで駆け抜け上手くサンドエリアに突入したものの、直後のバンクで失速。バイクを交換し終始粘って頑張りましたが取り返せずに7位で今季のシクロクロスレースを終了しました。

▶今季、海外遠征を含め幾多の酷使にも耐え抜き共に頑張ってくれたバイク。OnebyESU JFF#807z フレーム・OBS-CBD1.25THフォーク・77ステム・ジェイカーボンマホラハンドル・カーボンアキレスシートポスト・ナロウサーティソウルサドル・ジェイ・クランクを装着。DoCorsaNoveホイールにchallengeタイヤをセット。



▲体調を崩して久しぶりの参戦となったサポートライダーの大蔵こころ選手(早稲田大学)は、本調子とは言えずエリートWE1にて11位でした。



▲WE2に出場された江越未稀選手(VAPOR CX TEAM)は2位に51秒の大差をつけ見事優勝。男女混合のエンデューロでもソロで走り切り総合33位、ソロでは17位。JFF#807zにDixnaやgrungeの製品を装着いただいていた。



▲昨年末からJFF#807zに乗られているWE3に参戦の末吉多恵選手(Positivo)は堂々の2位。



▲多くのOnebyESU愛用者の皆さんを確認することができましたが、最初期モデルのカンティブレーキ仕様JFF#803シリーズで参戦する方も多数おられました。ありがとうございます。



◀ロードで活躍する佐藤光選手(Team Cyclers SNEL)はシクロクロス初体験。砂地を走ること全初の初心者。エンデューロにソロで参戦するもスタート寸前でバンクが見つかり、急速JFF#807zの試乗車で遅れてのスタート。無謀とも思われましたが、11周走り切りました。周回を重ねる度に扱いが上手になって行く姿が爽快で楽しませてくれました。ギアは春頃発売12Sの45x33Tプロト。

～トピックス～

WE2優勝の江越未稀選手はメタリックシルバーに塗装されたJFF#807zに、自身の手でカラフルな模様を入れておられ、一際可愛らしいフレームになっていました。力強い走りとの対比も美しいバイクでした。江越さんは「SENSHA Bicycle 金沢文庫」のスタッフさんでもあります。

